

(((ポイス)))

診療室秘話 そのⅢ

かつて私が子供の頃、「災害は忘れた頃にやってくる」と戒められてきたように思う。ところがどうでしょう、近年恐怖の記憶がさめやらぬうちに、次々と容赦なく襲来するのを見るにつけ、本当に自然の猛威に空恐ろしさを感じる昨今である。

昨年10月に襲った台風21号では私が住む近隣の町でも土石流による浸水があり集落の大半が被災した。被災者は悲しみに茫然自失、それでも黙々と片付けを続けている。メディアが災害、被災の生の声を継続して報道することにより防災の意識や見舞いの気持ちが広がる事を願わずにはいられなかった。その後も地元新聞が復興の様子を報道し続けていた矢先だった。新潟中越地震が発生した。私は阪神淡路大震災の記憶も生々しいこの時期又しても被災した日本列島は、この先まるでくの字にでも折れ曲がってしまうのではないかと思うほどに恐怖を感じた。新潟では40年前にも大震災があった。それは40年前二十歳の新成人が、今還暦を迎えて又しても大震災に見まわれたことになる。後を絶たない災害に、防災学者が「人類の歴史は災害との歴史である」、と説いていたがそれは学者ならずとも容易にうなずけ、実感する言葉であった。余談になるが私個人の災害史を思い出してみても、小学生の頃我国の火災史にも残る大火災で町が完全焼失、米軍の救援物資や、配給の缶詰めで飢えをしのいだことがあった。あの時英字がプリントされた救援物資に喜びながらも、アメリカの文化を幼心に感じたことを覚えている。また陸の孤島になった校庭が自衛隊のヘリポートになり離着陸の騒音の中で、救援隊との共同生活をした中学時代の出来事も思い出された。

スペインの諺に「山は山を必要としないが人は人を必要とする」とあったのを今更ながら思い出した。

ところで新潟中越地震発生後のある日、70代前半の男性が新患で来院した。主訴は噛める義歯をつくって欲しいというものだった。過去の受診についても話は延々つづいた。問診や口腔審査が少しやり難いほど、かなり患者流だった。残して欲しかった歯を抜かれたとか、支払った治療費ほどの成果はなかったとか今までの噛めない不満を一気に爆発させたものだった。結論に至るまで話は

長かったが患者さんは私からみれば人生の大先輩、そこは人間ウォッチングを試みた。リタイアされてはいるものの現役時代の知られざる厳しさもかいま見られた。ちょっと手強いなと言うのが正直な実感だった。いえ噛む事に過去満たされなかった老人の正直な気持ちが全身に出たと言ったほうが適切であろうか。噛めない治療に不信感を持たれていればなおのこと、ここで決めなければいけない。私が噛めるようにしてあげたい。

患者さんは予約日毎正確に来院を続けた。そんなある日のことだった。NHKテレビが新潟中越地震災害義援金受付のニュースを放送していた。アツツ、今治療中の患者さんだ。初診時の問診と咬合採得でかなり苦勞をしたので直ぐに気が付いた。画面に写る患者さんは予め準備していた封筒の中から義捐金を取り出し係員に渡していた。私は画面の老人に見入った。老人はカメラを別段意識する事も無く堂々としていた。以前私が長崎普賢岳災害の義捐に行った時、勝手の違う周囲にとまどって瞬をついて出てきた言葉が「アノー、噴火の・・・」で言葉を詰まらせた事があったが、戸惑った私とは違った老人のしぐさに彼はきっと心温まるリピーターに違いないと思った。義捐金を財布からではなく予め封筒に入れていた辺りに年配者の常識と礼を感じた。

昨今老人保健の自己負担額も増えている。今、期待しながら通院している噛める義歯も近々入る予定である。そうなれば治療費も必要となる。私はテレビに写る患者さんに「噛める義歯」を心から約束した。右下臼歯部のブリッジと上顎義歯の装着も年末を控えて念の為2度の調整を試みたが良好の判定を戴いた。調整最後の時にはチェアサイドで私的な話も聞いた。

健康維持と社会とのかかわりをもつ為にJR高架下の駐輪場の整備にパートで勤めて7年になるという。特に高校生には駐輪場でもできる礼節を分かって欲しい。とその指導方法も話しつづけた。噛める義歯に満足して私との会話も進んだものと自画自賛した。

スペインの諺にある必要とされる人にほんの少しだけ近づけたひと時だった。

神歯 太郎